

ドゥンス・スコトゥス『アリストテレス「命題論」 第1巻問題集』第1問題 試訳

著者	本間 裕之, 石田 隆太, 内山 真莉子, 小山田 圭一
著者別名	HONMA Hiroyuki, ISHIDA Ryuta, UCHIYAMA Mariko, OYAMADA Keiichi
雑誌名	筑波哲学
巻	25
ページ	39-47
発行年	2017-03
URL	http://doi.org/10.15068/00145666

ドゥンス・スコトゥス
『アリストテレス「命題論」第1巻問題集』第1問題 試訳

本間 裕之／石田 隆太／内山 真莉子／小山田 圭一

凡例

- ・訳出にあたっては次の版を底本とした。

ANDREWS, R., ETZKORN, G., GÁL, G., GREEN, R., NOONE, T., PLEVANO, R., TRAVER, A., WOOD, R. (eds). “B. Ioannis Duns Scoti Quaestiones in Libros Perihermenias Aristotelis”. In ETZKORN, G., GREEN, R., NOONE, T. (eds). *B. Ioannis Duns Scoti Opera Philosophica* II, pp.7-254. St. Bonaventure, N. Y., Washington, D. C.: The Franciscan Institute, St. Bonaventure University, The Catholic University of America, 2004.

- ・次の近代語訳も参照した。

BUCKNER, E. & ZUPKO, J. (trr). *Duns Scotus on Time & Existence: The Questions on Aristotle's “De interpretatione”*. Washington, D. C.: The Catholic University of America Press, 2014. [B&Z と略記]

- ・訳者それぞれのことを本稿では次のように略記を用いて表記する。

本間→H 石田→I 内山→U 小山田→O

- ・註などにおいても (H) のようにして担当者を明示する。
- ・訳者自身による訳文中の [] は訳者による補いであり、〔 〕 は原語の引用である。
- ・指示語および指示語を含む語句に関しては、必要に応じて指示内容を明確化して訳すよう心掛けた。
- ・註にて使用した文献の略記一覧は次の通りである。なお慣例に従い、アリストテレスの著作にはベッカー版の頁数と行数を付した。

AL

Aristoteles Latinus. Corpus Philosophorum Medii Aevi, Academiarum Consociatarum Auspiciis et Consilio Editum, 1939-.

Borgnet

B. Alberti Magni, Opera Omnia, ex Editione Lugdunensi Religiose Castigata, et pro Auctoritatibus ad Fidem Vulgatae Versionis Accuratiozumque Patrologiae Textuum

Revocata, Auctaque B. Alberti Vita ac Bibliographia suorum Operum a a Pp. Quéatif et Echard Exaratis, etiam Revisa et Locupletata. Ed. BORGNET, S. C. A. Parisiis: Apud Ludovicum Vivès, 1890-9.

Crawford

CRAWFORD, F. S. (ed). *Averrois Cordubensis Commentarium Magnum in Aristotelis de Anima Libros.* Cambridge, Massachusetts: The Mediaeval Academy of America, 1953.

Hamesse

HAMESSE, J. *Les Auctoritates Aristotelis. Un florilège médiéval. Étude historique et édition critique.* Louvain, Paris: Publications Universitaires, Béatrice-Nauwelaerts, 1974.

Herz

HERZ, M. (ed). *Prisciani Grammatici Caesariensis Institutionum Grammaticarum Libri XVIII.* Lipsiae: In Aedibus B. G. Teubneri, 1855-60.

Hispanus

COPENHAVER, B. P., NORMORE, C., PARSONS, T. *Peter of Spain: Summaries of Logic. Text, Translation, Introduction, and Notes.* Oxford: Oxford University Press, 2014.

Junctas

Aristotelis Opera cum Averrois Commentariis. Venetiis: Apud Junctas, 1562-74.

Leon.

Sancti Thomae de Aquino Opera Omnia Iussu Leonis XIII P. M. Edita. Romae, 1882-.

Magee

MAGEE, J. *Anicii Manlii Severini Boethii De Divisione Liber. Critical Edition, Translation, Prolegomena, and Commentary.* Leiden, Boston, Köln: Brill, 1998.

Meiser1

MEISER, C. (ed). *Anicii Manlii Severini Boetii Commentarii in Librum Aristotelis Περὶ Ἑρμηνείας.* Pars Prior. Versionem Continuum et Primam Editionem Continens. Lipsiae: In Aedibus B. G. Teubneri, 1877.

Meiser2

MEISER, C. (ed). *Anicii Manlii Severini Boetii Commentarii in Librum Aristotelis Περὶ Ἑρμηνείας.* Pars Posterior. Secundam Editionem et Indices Continens. Lipsiae: In

Aedibus B. G. Teubneri, 1880.

OPh

ETZKORN, G., GREEN, R., NOONE, T. (eds). *B. Ioannis Duns Scoti Opera Philosophica*.
St. Bonaventure, N. Y., Washington, D. C.: The Franciscan Institute, St. Bonaventure
University, The Catholic University of America, 1997-2006.

Peiper

PEIPER, R. (ed). *Anicii Manlii Severini Boetii Philosophiae Consolationis Libri Quinque
Accedunt Eiusdem atque Incertorum*. Lipsiae: In Aedibus B. G. Teubneri, 1871.

Rossi

Rossi, P. (ed). *Robertus Grosseteste. Commentarius in Posteriorum Analyticorum
Libros*. Firenze: Leo S. Olschki editore, 1981.

Verbeke

VERBEKE, G. (ed). *Ammonius. Commentaire sur le Peri Hermeneias d'Aristote*.
*Traduction de Guillaume de Moerbeke. Édition critique et étude sur l'utilisation du
Commentaire dans l'œuvre de Saint Thomas*. Louvain, Paris: Publications
universitaires de Louvain, Éditions Béatrice-Nauwelaerts, 1961.

Wodeham

WOOD, R. & GÁL, G. (eds). *Adam de Wodeham. Lectura Secunda in Librum Primum
Sententiarum*. St. Bonaventure, N. Y.: The Franciscan Institute, St. Bonaventure
University, 1990.

アリストテレス全集新

内山勝利、神崎繁、中畑正志 編『アリストテレス全集』第1巻～、岩波書店、
2013年～。

・この凡例は、特に断りがない限り、続く稿でも採用される。

はじめに

西洋中世の思想家ヨハネス・ドゥンス・スコトゥス(1266年頃～1308年)は、ア
リストテレスの『命題論』¹に対する2種類の問題集を学者としてのキャリアのおそ

¹ 『命題論』という日本語の呼び名が問題含みであることは早瀬篤も述べる通りである。Cf. ア
リストテレス全集新 1, pp.297-314. 本稿はあくまで便宜上『命題論』という呼称を用いている
だけであることを断っておく(I)。

らく初期に書いた。本稿は、その内の一方で、中世では『命題論』の「第1巻」と見なされた範囲²に基づいて13の問題から構成される方の著作である『アリストテレス「命題論」第1巻問題集』の試訳である。

本稿の訳出した第1問題では、『命題論』という著作の主題が何であるかが問われている。スコトゥスによれば、「意味表現」〔interpretatio〕について論じる『命題論』に固有な主題は、名詞と動詞が複合された「言明」〔enuntiatio〕ないし命題である。それゆえ、『命題論』の主題は、名詞と動詞そのものを考察する『カテゴリー論』と、論証についてのものである『分析論後書』の中間に位置づけられる。主題のこのような三区区分は、知性の三つの作用である単純把握、複合と分割、推論に対応して理解されている³。

第1問題の構成は以下の通りである。最初に、問題となるアリストテレスの原文（「第一に定めなければならないことは」云々）が提示され、ポエティウスの説も引き合いに出される。次に、1から2でスコトゥスの見解を提示していると思われる議論が展開される。最後に、3から5までで想定反論がされ、6から8まででそれに応答がなされる。以上を踏まえて、〈解答〉、〈異論〉、〈異論解答〉という区分けを訳文では便宜的に示した。

なお、本稿は下訳をHが作成した上で訳者全員が検討を加えて作成したものである(I)。

試訳

アリストテレス『命題論』第1巻問題集

第1問題

『命題論』の主題は何であるのか

「第一に定めなければならないのは」云々⁴。

² Cf. B&Z, p.15, n.15. 中世のアリストテレス註解では、『命題論』の内、現在では第1～9章と見なされている箇所が「第1巻」とされ、第10～14章と見なされている箇所が「第2巻」と理解されていた(I)。

³ Cf. B&Z, p.169 (I)。

⁴ アリストテレス『命題論』第1章 16a1 (ALII.1, p.5, l.3) 「第一に定めなければならないのは、名詞とは何であり動詞とは何であるのかである」(I)。

『命題論』の主題⁵に関しては、ポエティウス⁶がそれを意味表現〔interpretatio〕である——そのことを「ペリヘルメニヤス」〔Perihermenias〕という名称の翻訳もまた示している——と措定していることは知られるべきである。

〈解答〉

1. さて、もし意味表現の理拠〔ratio〕が「表示することの想像を伴って分節化され、発話された音声」〔vox articulata, prolata cum imaginatione significandi〕⁷であるとするなら、その場合に意味表現は複合的なもの〔すなわち命題〕と複合的でないもの〔すなわち名詞や動詞〕について言われるが、このことは『命題論』の固有な主題ではない。『命題論』は『範疇論』と『分析論前書』——『範疇論』は知性の第一の作用〔すなわち単純把握〕に関わるることについてのものであり⁸、『分析論前書』は第三の作用

⁵ Cf. ドウンス・スコトゥス『二巻本アリストテレス「命題論」問題集』第1巻序文第1-2段落(Oph II, p.135, ll.2-21)「哲学者〔アリストテレス〕が『魂について』第3巻〔第6章430a27-30〕で言うように、知性の作用は三通りある。一つは、不可分なもの知解——それに即して知性は単純な諸概念を形成すると言われる——と言われるものである。知性のもう一つの作用は、それに即して知性が複合し分割するものであり、それは複合ないし分割と言われる。この二つの作用に、既知のことから未知のことへという仕方、一方から他方へ漸進すること〔discurrere〕である第三の作用が加えられる。／知性の第一の作用〔すなわち単純把握〕に属することに関わるのが『範疇論』であるが、作用そのものに関わるのではない。なぜなら、実体について規定することが属するものにその実体の作用について規定することが属するのだから、作用について規定することは〔そのことについて〕規定する『魂について』に固有なことだからである。実際、『範疇論』が全般的に関わるのは単純な諸概念、ないし、知性がそれらについて形成したり知解したりする諸概念であり、その限りで〔すなわち知性によって形成されたり知解されたりする限りで〕その諸概念は類において自体的に言われうるものであり秩序付けられうるものである。他方で、知性の第二の作用〔すなわち複合と分割〕に属することに関わるのが『命題論』であるが、知性の作用に関わるのではない。というのも、複合や分割を行う知性は、それについて〔論じることが〕『命題論』で意図されている言明を形成するが、言明は、知性の活動そのものであるのではなくて、むしろ知性によって行われるからである。他方で、知性の第三の作用〔すなわち推論〕に属することに関わるのが新論理学の諸著作であるが、既知のことから未知のことの認識を有することへと進行するべき時に、その新論理学において教えられる」(I, H)。

⁶ ポエティウス『アリストテレス「命題論」註解』(第2版)第1巻(Meiser2, p.6, ll.25-8)「そのようなわけで、単なる言表ではなくて動詞や名詞についても、また単なる語り〔locutio〕だけではなくて表示を行う語り〔locutio significativa〕——それが意味表現である——についても、『命題論』ではアリストテレスによって論じられる」(I)。

⁷ Cf. ポエティウス『アリストテレス「命題論」註解』(第2版)第1巻(Meiser2, p.6, ll.1-5)「したがって、この三つ、すなわち舌の振動〔linguae percussio〕、音声の分節化された響き〔articulatus vocis sonitus〕、発話することの何らかの想像〔imaginatio aliqua proferendi〕が共起することで意味表現が生じる。というのは、意味表現とは自身を自体的に表示する分節化された音声だからである」(I, H)。

⁸ Cf. アリストテレス『魂について』第3巻第6章430a26-8「さて、「分割されないもの」を対象とした知性認識は、それについて偽であるということが成立しない事象のうちに属する。こ

〔すなわち推論〕に関わることについてのものである——の中間の順序を保持しているのだから、それゆえ、『命題論』は知性の中間の作用〔すなわち複合と分割〕に関わることについてのものであることになる。ところで、意味表現の理拠が先述の理拠であるにせよ、あるいは他の人々⁹によれば、より特定の理拠、すなわち「何かであることあるいはそうであらぬことを表示することの想像を伴って分節化され、発話された音声」〔*vox articulata, prolata cum imaginatione significandi aliquid esse vel non esse*〕であるにせよ、「意味表現」が『命題論』での主題ではないことになる。というのも、論理学における主題の特性〔*passio*〕はすべて、いかなる音声も存在することなくその主題の内に等しくあるがゆえに、『「範疇論」問題集』第1問題の始め¹⁰で既述のように、論理学のいかなる部分も主題として音声には関わらないからである。

2. それゆえ、『命題論』では言明〔*enuntiatio*〕が適切な仕方ですべて主題として規定されるのであるが、それは「精神における言明」〔*enuntiatio in mente*〕のことである。なぜなら、そうした言明は知性の第二の作用〔である複合や分割〕から原因されるからである。その理由は以下の通りである。『命題論』で規定されることは、言明のために規定される。すなわち、例えば名詞や動詞のような言明の不可欠な諸部分について第一に〔規定される〕。第二に言明の類——それは言表〔*oratio*〕である——について〔規定される〕。次いで、言明とは何かについて、そして言明をその第一の諸々の種へ分割することについて〔規定される〕。そして結果として、言明の固有性について、すなわち対立〔*oppositio*〕、状態〔*habitus*〕、他のこの種の事象について〔規定される〕。他方で、もしそうした固有性が音声における言明〔*enuntiatio in voce*〕に内在するとしても、こうした固有性が音声における言明に内在しているのは、自体的に

れに対して、それについて偽も真もともに成立する事象においては、諸々の知性認識された事柄が、一つであるような仕方ですべてまとめられて、それらの一定の結合がすでに成立している」(アリストテレス全集新7, p.152); トマス・アクィナス『アリストテレス「魂について」註解』第3巻第5章 (Leon. 45.1, pp.224-8); 『アリストテレスの諸権威』(Hamesse, p.187, ll.59-63)「知性の作用は二通りある。一つは単純な諸項の把握と言われるものである。／もう一つは把握された単純な諸項の複合および分割であり、その下には第三の作用、すなわち迂遠なる推論〔*ratiocinatio remota*〕が包含される」(H)。

⁹ Cf. トマス・アクィナス『アリストテレス「命題論」註解』第1巻 (Leon. 1.1[2 ed.], p.6, ll.48-50)「実際、何かは真ないし偽であると説明する者は意味表現していると思われる」(I)。

¹⁰ ドゥンス・スコトゥス『アリストテレス「範疇論」問題集』第1問題第11段落 (OPh I, p.251, ll.11-5)『「範疇論」は第一の主題として十の音声〔すなわち十範疇〕に関わるのではない。また論理学のいかなる部分も音声に関わらない。なぜなら、三段論法およびその全部分の特性はすべて、それらが発話されなくても精神において有する存在〔*esse*〕に即して、三段論法の内に入りうるからである」(I)。

第一にではなくて、音声が生精神における言明を表示するもの〔*signum*〕である限りにおいてである¹¹。

〈異論〉

3. 以上に反対する。

主題は〔当の〕学知において規定されることすべてに共通であるべきである。〔ところで、〕言明はそうではない。というのも、『命題論』では名詞と動詞——それらについて言明は述語付けられない——について規定されているからである。

4. また、ポエティウス¹²——彼は『命題論』を意味表現についてのものであると言う——の権威は反対にある。

5. また、精神における言明が主題ではないことの証明は以下の通りである。名詞や動詞は精神における言明の部分ではない。というのも、名詞も動詞も音声だからである。しかるに、名詞や動詞は、『命題論』でそれについて規定される言明の部分である。

〈異論解答〉

6. 第一のもの〔すなわち3〕に対して：もし大前提〔すなわち、主題は当の学知において規定されることすべてに共通であるべきだということ〕が、述語付けの普遍性——自らの諸部分に対する普遍的な全体〔*totum universale*〕に属するような——について理解されるとするなら、それは偽である。というのも、自らの主題が複合的である学知すべてにおいては、主題の諸部分について規定することは必然だが、しかしながら、その諸部分に主題が述語付けられるのではないからである。しかし、もし何ら

¹¹ スコトゥスは「学知の主題」ということに関して、以下の三つの条件を挙げている。Cf. ドゥンス・スコトゥス『ポルピュリオス「イサゴゲー」問題集』第3問題第13段落 (OPh I, p.14, II.3-10)「学知における主題には、要求される三つの条件があることが知らなければならない。すなわち〔第一には〕、「何であるか」〔*quid est*〕と「あること」〔*quia est*〕が既知のことであるということである。というのは、『分析論後書』第1巻〔第1章 71a11-6〕で言われるように、論証においてはこの二つのことを前提しなければならないからである。第二の条件は、主題の「何であるか」を通じて、何であるかに関するその主題の諸特性が学知において論証されるということである。第三の条件は、学知において規定される他のすべてのことが、主題へと還元されて主題のために考察されるということである。というのも、そうでなければ、主題の一性によって学知の一性があることにはならないであろうからである」(H)。

¹² ポエティウス『アリストテレス「命題論」註解』(第2版)第1巻 (Meiser2, p.6, l.28 - p.7, l.5)「したがって、動詞や名詞、および表示を行う語りに意味表現という名称は適しているのだから、それら——それらについて『命題論』では論じられることになる——に共通な名称、すなわち意味表現に基づいて、『命題論』も意味表現についてのものであると題名が付けられている」(I)。

かの仕方では当該の大前提が真であるとするなら、その場合には、主題は共通であると理解されるべきである。なぜなら、学知において主題の認識は、他のすべてのことの認識において、他のそれらが主要な主題の認識のために規定される限りで、主要な仕方では問われるからである。

7. 第二のもの [すなわち 4] に対して：『ポルピュリオス「イサゴゲー」問題集』第3問題¹³で既述のように、そのいかなるものも主要な主題ではない多くのことについて学知があるとされる。

¹³ ドゥンス・スコトゥス『ポルピュリオス「イサゴゲー」問題集』第3問題第17段落 (OPh I, p.15, ll.15-9) 「形而上学者、弁論術家、詭弁家が同じものに関して考究するのは、主題が同じだからではなくて、それを通じてはすべてのものに関して考究することがありうるような何らかのことが論理学では考察されるからである。というのは、学知においては多くのことに関して考究されるが、しかしながら、だからといってそれらのいかなるものも学知における主要な主題であるわけではないからである」；第20段落 (p.16, l.17 - p.17, l.14) 「[論理学の] 第一で固有な主題は三段論法である。その理由は以下の通りである。三段論法は第一の条件 [すなわち、「何であるか」と「あること」が既知のことであるということ] を保持している。なぜなら、三段論法の諸部分に関する——旧論理学での——規定の後で直ちに、『分析論前書』の始め [すなわち第1巻第1章 24b22-4] において、三段論法の定義をアリストテレスは前置きしているからである。三段論法は第二の条件 [すなわち、主題の「何であるか」を通じて、何であるかに関するその主題の諸特性が学知において論証されるということ] も保持している。なぜなら、『分析論前書』においてアリストテレスは、三段論法の定義を通じて、三段論法に関する多くの特性——例えば様相や格——を示しており、「したがって、これらの格においては」結論が必然的に生じるということを通じて云々という章 [すなわち第1巻第23章] では、その諸特性の中では内在 [in esse] と様相について、例えば三つの項を有することを示しているからである。三段論法は第三の条件 [すなわち、学知において規定される他のすべてのことが、主題へと還元されて主題のために考察されるということ] も保持している。その理由は次の通りである。三段論法のためには、三段論法の諸部分、すなわち複合的でないものと言明や、『分析論前書』と『分析論後書』では主題的な三段論法の不可欠な諸部分について規定され、立証の他の種についても、それらの種は三段論法へと還元される——不完全なものが完全なものへと還元されるように——がゆえに規定され、三段論法の欠如としての詭弁的三段論法についても、所有と欠如を認識することは同じものに属するがゆえに規定される。それゆえ、以上のように、三段論法の区分とその区分に帰属しているもののもので、論理学の区分は明らかである」；第24段落 (p.19, ll.1-14) 「三段論法に形相的に従う固有性にとっては、三段論法は『分析論前書』の主題である。他方で、それ自身における、または三段論法に対して不可欠な、あるいは下層的な、あるいは還元可能なその諸部分におけるすべての特性にとっては、三段論法は論理学全体の主題である。[しかし] 主題は、学知において考察されるものすべてに述語付けられるのではなくて、他のものが考察されることのためにあるものでなければならず、それは自然学の主題について明らかな通りである。自然学の主題とは可動的な物体であるが、しかしながら、自然学では運動および自然——それらは可動的な物体ではない——について論じられる。あるいは以下のように言われうる。全体の主題が、その主題の認識のために多くのことが規定されることを要求する場合には、諸学知において大前提 [すなわち、何ものも全体と部分の主題ではないということ] は偽である。その理由は次の通りである。多くのことが規定されることを全体の主題が要求する場合には、当の学知においてはその多くのことについて規定しなければならず、これと同時に、主題そのものについても規定しなければならない。したがって、学知の或る部分は、全体の主題である主題に関するものであることになる。そうであるのは、自然学全体との関連での『自然学』について明らかな通りである」(H)。

8. 第三のもの[すなわち5]に対して:私は以下のように言う。音声における名詞と動詞が音声における言明の部分であるのと同様に、精神における名詞と動詞は精神における言明の部分である。というのも、音声における名詞と動詞および精神における名詞と動詞が表出されなくとも、知性の第一の作用[すなわち単純把握]において知性によって捉えられるものは、第二の作用[すなわち複合]において複合されるからである。名詞も動詞も音声であると言われる際には、次のいずれかである。まずは、名詞も動詞も音声であるということは、名詞と動詞が私たちにいっそう知られるようになるということに即して真である。なぜなら、精神にある限りでの名詞と動詞に関する記述が名詞と動詞に関する記述を通じて明らかとなるためには、[音声である]名詞と動詞に関する記述が割り当てられるべきだったからである。あるいは、名詞が音声であるということと名詞が音声においてあるということは別である。なぜならおそらく、音声は本質的には音声においてあらぬもの、すなわち、音声が表出されたものそのものでもあるようには表出されないものでありうるからである。そして音声の名詞の定義に措定されるのは第一の仕方によってである。

(ほんま・ひろゆき 東京大学大学院人文社会系研究科在学)

(いしだ・りゅうた 筑波大学大学院人文社会科学研究科在学／

日本学術振興会特別研究員)

(うちやま・まりこ 慶應義塾大学大学院文学研究科在学)

(おやまだ・けいいち 東京工業大学非常勤講師)

※本稿は、JSPS 科研費 15J00085 (石田) の助成を受けたものである。